

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17387

研究課題名(和文) グローバル社会を生きる移民の子どもの居場所づくり：日米のコミュニティの支援と連携

研究課題名(英文) Creating Ibasho for Immigrant Children: Community Engagement and Collaboration in Japan and the United States

研究代表者

徳永 智子 (Tokunaga, Tomoko)

慶應義塾大学・国際センター(三田)・特任講師

研究者番号：60751287

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日米の地域コミュニティによる移民の子どもの教育支援および支援ネットワークのあり様を考察した。アメリカのNPOは、移民の子どもやコミュニティが本来もつストレンクスや資源に着目し、それらを活かすべく、多様な教育アクターと協働し、子ども主体の教育支援を行っていた。また、アクション・リサーチの視点から、コミュニティの人々と協働して移民の子どもの居場所づくりに取り組み、実践者との協働による研究・実践の可能性を検討した。

研究成果の概要(英文)：This research explored the ways in which communities build network and provide educational support for immigrant children in the United States and Japan. The NPOs in the United States took strength-based approach and provided child-centered educational support, often in collaboration with various educational actors. This study also took action research approach and the researcher collaborated with local communities to create ibasho for immigrant children and examined the possibilities of community based participatory research.

研究分野：教育社会学

キーワード：居場所 移民 協働 コミュニティ 教育支援

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進展とともに越境する人々が増加するなか、世界各国で移民の子どもの教育問題が大きく議論されている。日本でも、1970年代ごろから増加した中国帰国者、インドシナ難民、日系南米人などの「ニューカマー」の子どもの教育課題を扱った研究が蓄積されてきた。しかし、その重要性は指摘されながらも、中心的な主題として考察されてこなかったテーマに移民の子どもの「居場所」問題がある。彼ら、彼女らは、移動を経験し、日本国内でエスニック・マイノリティであることから、構造的・文化的に抑圧・周辺化されており、「ホッと安心できる、心が落ち着ける、そこに居る他者から受容され、肯定されていると実感できるような」(住田、2003:5)「居場所」をつくることは困難な状況にある。社会教育学を中心に発展してきた「居場所研究」の領域では、居場所の条件や居場所支援に関する研究の蓄積がみられながらも、エスニック・マジョリティである日本人を対象としており、マイノリティの居場所は十分に考察されていない。移民の子どもに特有な点を考慮しつつ、当該生徒にとっての居場所は何を意味し、いかなる居場所づくりが求められているのかを検討する必要がある。

移民の子どもの居場所づくりを行う上で重要な役割をもつのが、家庭でも学校でもない第三の場としての地域コミュニティである。アメリカでは、Community Based Organization (CBO) と呼ばれる、コミュニティに根差して地域の支援活動を行う NPO が数多く存在する。CBO は、マイノリティの子どもの文化・言語や知識を尊重し、生徒のアイデンティティを形成するなど、その意義が着目され、研究が蓄積されている(Reyes, 2007; Weis & Dimitriadis, 2008)。また、これらの CBO が単独で支援をするのではなく、他の CBO・学校・企業と連携したり、地域

の大学と研究・教育のパートナーシップを構築したり、コミュニティの多様なアクターが協働して当該生徒の教育に関与している。野津(2007:3)は、このような教育支援のあり方を「ネットワーク型支援」と呼び、「地域社会のさまざまな人や資源を利用し、多様で水平的なつながりの中から支援を模索し構築すること」を基本理念として挙げている。様々な背景をもった複数のアクターが移民の子どもの教育に携わることで、当該生徒の居場所は複数化・ネットワーク化し、居場所づくりにおいて大きな効果をもたらすことが予想される。

2. 研究の目的

本研究では、アメリカと日本において、地域コミュニティが移民の子どもに対していかなる教育支援を行い、コミュニティのアクター同士がいかにしてネットワークを形成しているのかを明らかにすることを目的とする。また、アクション・リサーチの視点を取り入れ、研究者としての立ち位置や役割を問い直しつつ、コミュニティの人々と協働して行う研究や実践の可能性を探る。

3. 研究の方法

(1) 理論・先行研究の検討

関連する国内外の理論・先行研究(居場所研究、コミュニティによる教育支援、地域参加型研究など)を整理・検討した。

(2) インタビュー・参与観察

日本とアメリカにおいて、移民の子どもの教育支援を行う NPO/NGO、学校、大学などを訪れ、NPO スタッフ、教員、子ども・若者などへのインタビューおよび参与観察を行った。アメリカでは、2015年8月、2016年8月、2017年3月に中国系移民の若者支援を行う NPO が多く集まる中華街でフィールドワークを行った。

(3) アクション・リサーチ

日本では、マイノリティ生徒が多く在籍する高校において、高校・NPO・大学と協働し、言語や文化の交流を行うクラブ活動に関わり、居場所づくりの実践の改善を目指した。

4. 研究成果

(1) ストレngthス・アプローチに基づく教育支援

アメリカの中華街にあるNPOは、移民の子どもやコミュニティが本来もつストレngthスや資源に着目し、それらを活かすべく、様々な教育支援を行っていた。例えば、移民の子ども達の生きられた経験や若者文化を尊重したプログラムを提供していた。また、子ども達の参加・参画が重視されており、生徒たち自身がコミュニティ・プロジェクトを企画・運営したり、ユースプログラムの司会進行をしたり、地域コミュニティの研究をしたりしていた。子ども達が主体的にプログラムづくりに関わることで、リーダーシップスキルやライフスキルが育成されていた。外部団体との連携の取り組みも多くみられ、例えば、他のNPOと共にワークショップを企画・運営したり、ユースコーディネーターのネットワークを目的とした会議を定期的で開催したり、それぞれの団体の強みを活かし、弱みを補完し合う支援体制が見られた。

(2) 居場所概念の応用可能性

日本特有の概念である「居場所」と欧米の類似の概念（「ホーム」など）とを比較検討し、居場所概念の応用可能性を考察し、英語で海外に発信することを試みた。居場所という概念は、日本では一般的に使用されているが、抑圧・周辺化されたマイノリティの子ども達の支援のあり方を考えるうえでも有益な視点を提供している。国際学会等で、居場所（*ibasho*）の構成要素や移民の子ども達の居場所づくりの重要性などについて英語で報告したところ、海外の研究者や実践者からも高

い関心を持たれた。この点について、英語による単著もまとめ、Springer社から刊行した。

(3) アクション・リサーチの可能性

社会科学の研究パラダイム転換がみられるなかで、本研究では、研究と実践の境界を越え、コミュニティの人々と協働して実践の改善や支援に取り組んだ。具体的には、日本において、マイノリティ生徒が多く在籍する高校で、学校・NPO・大学と協働し、多文化・多言語が尊重される居場所づくりの実践に取り組んだ。また、アメリカで蓄積のあるサービス・ラーニングの研究・実践を参考にし、勤務校でサービス・ラーニングの授業を開講し、大学生と共に多文化の居場所づくりに関わった。居場所の固定化や排除の問題がありつつも、実践者とふりかえりを重ね、開かれた居場所づくりを目指して実践の改善に取り組んだ。当該研究の成果は広く社会に発信すべく、実践者と協働して国内の学会やシンポジウム等で報告したり、共著論文を執筆したりし、コミュニティの人々と共に研究を行う試みを重ねた。国内学会・国際学会でも、アクション・リサーチにおける研究者自身の立場性や役割を考察した論文を発表した。当該研究の成果をもとに、今後は「参加型アクション・リサーチ」の可能性と課題を検討し、移民の若者と共同研究を行うなど、新しい「研究」のあり方を開拓していきたい。

<引用文献>

- 住田正樹(2003)『子どもたちの『居場所』と対人的世界』住田正樹・南博文(編著)『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会、3-17。
- 野津隆志(2007)『アメリカの教育支援ネットワーク - ベトナム系ニューカマーと学校・NPO・ボランティア - 』東信堂。
- Reyes, A. (2007). *Language, Identity, and Stereotype among Southeast Asian*

American Youth: The Other Asian.
Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.
Weis, L. & Dimitriadis, G. (2008).
Dueling Banjos: Shifting Economic and
Cultural Contexts in the Lives of Youth.
Teachers College Record, 110(10):
2290-2316.

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

徳永智子、異文化交流の先にあるもの -
大学における越境する教育実践 -、授業
づくりネットワーク、査読無、27号、2017、
pp. 26-31

徳永智子・井本由紀、多文化クラスにお
けるチーム・エスノグラフィーの教育実
践、異文化間教育、査読有、46号、2017、
pp. 47-62

Tomoko Tokunaga, 'We Dominate the
Basement!': How Asian American Girls
Construct a Borderland Community,
*International Journal of Qualitative
Studies in Education*, 査読有, Vol. 29,
No. 9, 2016, pp. 1086-1099
DOI: 10.1080/09518398.2016.1201162

[学会発表](計13件)

Tomoko Tokunaga, "To Find a Better Way
to Live a Life in the World":
Co-Constructing *Ibasho* with Chinese
Immigrant Youth in the United
States," Annual Conference of the
American Anthropological Association,
2017

Tomoko Tokunaga, An Autoethnographic
Exploration of *Ibasho* Project with
Chinese Immigrant Youth in the United
States, Annual Conference of
Anthropology of Japan in Japan, 2017
徳永智子、定時制高校における多文化の

若者の居場所づくり - 高校・大学・NPO
の協働によるクラブ活動の実践 -、第24
回多文化間精神医学会学術総会、2017
徳永智子、Becoming "Asian" in
America: Consumption Practices among
Asian American Girls、日本教育学会第
76回大会、2017

徳永智子・角田仁、多文化の若者による
エンパワメントと居場所づくり - 定時制
高校におけるクラブ活動の実践 -、異文
化間教育学会第38回大会、2017

Jennifer McGuire & Tomoko Tokunaga,
Beyond Integration or Inclusion:
Reimagining the Role of Support
Classes for Minority Students in
Japanese Schools, The Annual
Conference of the Association for
Asian Studies, 2017

徳永智子、アメリカにおけるアジア系移
民の教育支援 - NPOの可能性に着目して
-、日本教育社会学会第68回大会、2016
Tomoko Tokunaga, How Asian American
Girls Create *Ibasho*/Home at a
Community-Based Organization, Annual
Conference of American Educational
Research Association, 2015

[図書](計7件)

Tomoko Tokunaga, *Learning to Belong in
the World: An Ethnography of Asian
American Girls*, Springer, 2018, 156

Tomoko Tokunaga, Co-producing Glocal
Knowledge: Possibilities of
International Education Courses in
Japan, In A. Selvi & N. Rudolph (Eds.),
*Conceptual Shifts and Contextualized
Practices in Education for Glocal
Interaction: Issues and Implications*,
Springer, 2017, 245 (127-146)

Tomoko Tokunaga, Breaking in or
Dropping out? Filipina Immigrant Girls

Envisioning Alternative Lives in a Globalized World, In R. Tsuneyoshi (Ed.), *Globalization and Japanese "Exceptionalism" in Education: Insider's Views into a Changing System*, Routledge, 2017, 216 (95-111)

徳永智子、グローバル社会を生きる移民の子どもエンパワメント：アメリカのNPOの取り組みから、明治学院大学教養教育センター・社会学部編『明治学院大学教養教育センターブックレット2 外国につながる子どもたちと教育 - 「内なる国際化」に対応した人材の育成 - 』かんよう出版、2017、102 (75-82)

Tomoko Tokunaga & Chu Huang, "I Feel Proud to Be an Immigrant": How a Youth Program Supports Ibasho Creation for Chinese Immigrant Students in the US, In W. Ma & G. Li (Eds.), *Chinese-Heritage Students in North American Schools: Understanding Hearts and Minds Beyond Test Scores*, Routledge, 2016, 282 (164-179)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

徳永 智子 (TOKUNAGA, Tomoko)

慶應義塾大学・国際センター・特任講師

研究者番号：6 0 7 5 1 2 8 7